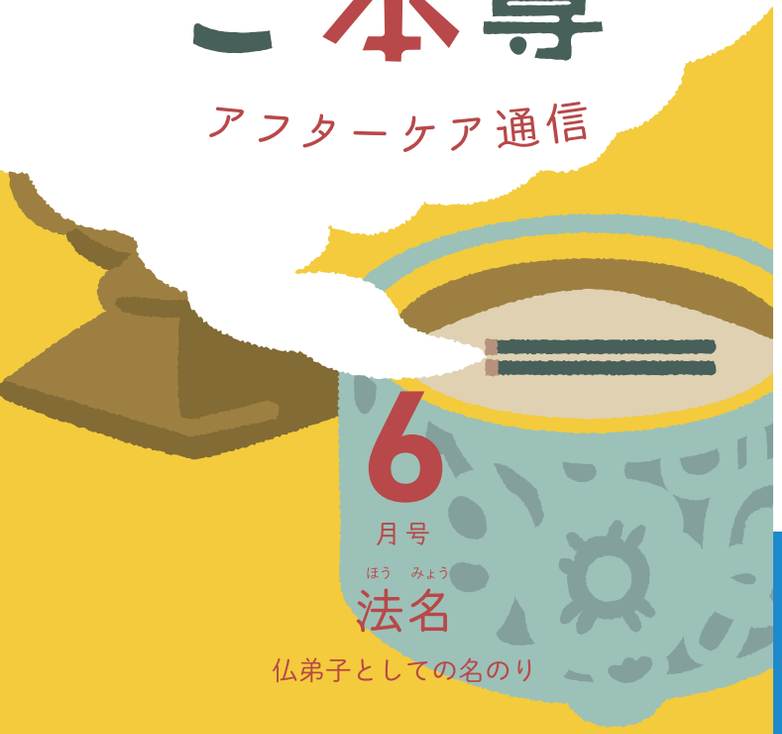
ごほんぞん

ご本尊

アフターケア通信



6月号

法名

仏弟子としての名のり

コラム

お香は浄土の功徳

燃香と焼香

香は元来インドで心身を清める生活習慣として用いられていたものが、仏教でも仏前を荘厳する意味で使われるようになりました。

燃香　もともとは香炉に香を敷いて火をつけたもの（常香盤）が由来ですが、現在は線香で代用します。線香は香炉（土香炉）の大きさに合わせて折り、火をつけて灰にねかせて置きます。普段のお勤めのときに用います。

焼香　香炭をいれた金香炉に香をいれます。主に法要・葬儀などのときに行います。

真宗大谷派のお焼香作法

①ご本尊を仰ぎ見ます。
※この時は合掌をしません。

②焼香卓の端に左手を添え、右手で香をつまみます。

③香炉に２回いれます。
※香をいただいたり、香の煙をあおぎません。

④つまんだ香の乱れをととのえます。

⑤合掌し、念仏を称えます。

⑥合掌を解き、頭礼します。

表紙イラスト「香炉（土香炉）」
・・・火をつけた線香をねかせて置きます。

kyushu-kyoku
九州教区
真宗大谷派 東本願寺 Higashi Hongan-ji
発行：真宗大谷派 九州教区教化委員会
〒830-0038 福岡県久留米市西町 540-1 TEL.0942-32-3056

今月の門徒さん

「おこがましくもあり、うれしくもあり」

古川 正二さん　（八女組 淨光寺）

現在 70 代ですが、幼いときに熱にうなされお念仏を必死に称え続けたかすかな記憶があります。今思えば、これが仏教との出遇いだったようです。

30 代で『歎異抄』第一章「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて…」の文に感銘を受け、そこから私の聞法生活が始まりました。その後、淨光寺で帰敬式を受式し、「釋誓願」の法名をいただきました。それはおこがましくもあり、うれしくもありの心境でした。

俗名も法名もどちらも大切に名のっていきたいと思いますが、せっかくいただいた法名を名のる場がないのはもったいないです。せめて、聞法会では皆で堂々と法名を名のれるようになったらいいと思っています。

いただいた法名を皆で披露しあい、掛けられた願いをお互いに確認しあう場があったら良いですね。

法名（ほうみょう）

法名とは？

浄土真宗における法名は、「釋（しゃく）○○」（女性の場合は「釋尼（しゃくに）○○」）として用いられます。仏法に自らの生き方を聞いていく名前です。

「釋（釈）」の字はお釈迦さまの「釈」を意味します。その昔、中国の道安という僧侶が「仏教徒はすべてお釈迦さまの教えを聞く者であるから、『釈』を姓にすべきである」と唱え、その考えが広まりました。言い換えれば、生まれた時や場所が違えども、仏法を聞く者は皆家族であるとも言えるでしょう。

親鸞聖人も「釈」の字はお釈迦さまの御弟子、つまり仏弟子をあわらす言葉だと述べ、自らを「愚禿釈親鸞（ぐとくしゃくしんらん）」と名のりました。

法名と戒名の違い

「法名」とは別に「戒名（かいみょう）」という言葉が使われることがあります。どちらも仏教徒としての名前であるということは共通しています。

しかし、「戒名」は戒律（修行者の生活規範）を守り従うことを誓った者に授けられるものであって、浄土真宗には受戒ということがありませんので用いません。

親鸞聖人が「非僧非俗（ひそうひぞく）」（僧にあらず、俗にあらず）とご自身のことを表明されたように、僧俗の区別や地位の別なく、「釈」の名のもとに、仏弟子として仏法に自らをたずねていく名前が「法名」なのです。

ですから、法名は亡くなった人に付ける名前ではなく、本来は「帰敬式（きけいしき）（おかみそり）」を受式して、生きている間にいただくものなのです。

帰敬式（きけいしき）（おかみそり）を受けましょう

「帰敬式」（おかみそり）は「仏・法・僧」の三つの宝に帰依（きえ）することを誓う儀式です。三つの宝とは、真実に目覚められた「仏」と、その仏が説いてくださった「法」（教え）と、その仏の説かれた法に生きる人々の集まり「僧」（僧伽（そうが））を指します。そして、これらを敬い人生の依りどころとして生きることを「帰依三宝（きえさんぼう）」と言います。

実際にかみそりを用い、髪を剃りおとすことはしませんが、式の中でそれをかたどった「剃刀（ていとう）の儀」が行われることから「おかみそり」とも言われます。

帰敬式は京都の真宗本廟（東本願寺）で受式できます。また、真宗大谷派の別院で大きな行事があるときや、所属のお寺で受式することもできます。詳しくはお寺にご相談ください。ともにご本尊に手を合わせ、お念仏の教えを聞くものとなるよう、ぜひ帰敬式を受式しましょう。